

# 会 議 録

## 1 会議名

令和4年度第1回小林古径記念美術館運営委員会

## 2 議題（公開・非公開の別）

- (1) 令和4年度の事業結果について（公開）
- (2) 令和5年度の事業内容について（公開）
- (3) 今後の美術館運営に対する意見徴収（公開）

## 3 開催日時

令和5年2月21日（火）午後2時00分から

## 4 開催場所

小林古径邸 画室

## 5 傍聴人の数

0人

## 6 非公開の理由

議題(3)については、会議公開制度の条例第7条第4号「意思形成過程情報」に該当するため、非公開。

## 7 出席した者（傍聴人を除く）氏名（敬称略）

- ・委員：高橋信雄（委員長）、五十嵐史帆（副委員長）、大塚啓、川崎日香湊
- ・事務局：宮崎館長、笹川統括学芸員、市川主任学芸員、伊藤学芸員

## 8 発言の内容

（あいさつ）

（笹川統括学芸員）：会議には野田委員が欠席との連絡が届いている。開会にあたりまして、宮崎館長からあいさつを申し上げます。

（宮崎館長）：この時期に令和4年度の行事、5年度の新しい取り組みについてご意見をいただける場を設けさせていただいた。ありがたいことに、コロナも収まりつつあり、観桜会についても元に戻る。私たちの活動も元に戻ってくるということを見据えながら、状況を見ながら前に向かって、明るく事業を進めていきたい。委員の皆さんには、先が明るくなるようなご意見をいただければと思っている。

（笹川統括学芸員）：続きまして高橋委員長よりごあいさつをいただく。

（高橋委員長）：前回の委員会は書面開催。最後に対面でしたのは昨年の7月。ずいぶん久しぶりだと思う。3年間コロナでいろんなものが休んだりしている。先ほど館長からもあったが、経済界は完全にコロナはない状態を想定して動いている。観桜会もそうだが、確実に元に戻っていく年になっていくと思う。ちょうど古径の生誕140周年にも入っていくので、そういう面でも美術館は忙しくなると思う。その間いろんな企画展をやっていたので、今日も開催されている「かわいい美術展」を少し見たが、とても面白い企画でこういう発信の仕方は重要だと感じた。上越に住んでいる方が気軽に来られる、

という面と、古径の作品を求めて遠方から来られる方の、両方できる美術館だと思っている。運営する方は大変だと思うが、運営委員会が少しでも運営に寄与できるように助言や意見ができるようにしたいと思っている。

(1) 報告事項「令和4年度の事業結果について」(公開)

(笹川統括学芸員が資料にもとづき説明)

- (大塚委員) : 入館者がなかなか伸びない、という話があったが、今までの企画展の中で1番入館者数が多かった企画展は何か。
- (笹川統括学芸員) : 上越市立総合博物館時代の美術展で、平成10年の「いわさきちひろ」展。23日間で3万人以上の入館者数があった。
- (大塚委員) : 知名度が高かったからか。
- (笹川統括学芸員) : それもあると思う。今同じことをやってもこれだけ来るかはわからない。ほかの展覧会だと、平成4年の平山郁夫の展覧会。23日間で2万8千人とか。当時は1回の展覧会で平均すると1万人くらいの入館者数だった。
- (高橋委員長) : それ以前のデータはないのか。上村松園とか。40年ぐらい前だったか。
- (笹川統括学芸員) : 上村松園の《序の舞》が来たことがあった。(文化財指定される前、修復される前のもの) その時は2万5千人。
- (高橋委員長) : 当時、上越市はいい展覧会をやっているとうらやましがられていた。背景には当時の植木市長が芸術にお金をかけてくれていた。そういう面では毎年特別展をやらざるを得なかった部分もある。全県から上越に展覧会を見に来ていた。
- (笹川統括学芸員) : 年に2回の特別展を必ずやっていた。
- (宮崎館長) : 学校も毎年動員がかかって、バスで生徒を連れてきていた記憶がある。
- (川崎委員) : 祖母が昨日あったかのように「《序の舞》がきたのよ」といっている。
- (笹川統括学芸員) : そのころと今とは状況は変わってきている。
- (高橋委員長) : 作品を借りること自体にコストがかかるようになってきたということもあるかもしれない。日本画は貸す方もリスクがある。かつてはそういう時代があったということだ、そんなことを覚えている人もだいぶ少なくなってきている。
- (笹川統括学芸員) : テレビの視聴率と同じでこの作品を見に来るということはなく、興味が多様化してきている。「名品」といっても「自分に興味がなければ見ない」ということもあるのではないか。
- (高橋委員長) : それは上越という狭い地域だけの話ではなく、全国的、著名な美術館でも同じなのだろうか。動向はわかるものか。
- (笹川統括学芸員) : 入っているところは入っている。ただ、全体的には数字が下がってきている。
- (高橋委員長) : 東京ステーションギャラリーで佐伯祐三展をやっているが結構入っているようだ。立地もいいし、空いている時間に見られるのはいい。この美術館も魅力がないわけではないのではないのだろうか。
- (笹川統括学芸員) : 魅力を伝えきれていないのではないかと感じている。
- (高橋委員長) : 今やっている高校生の企画など、非常に面白いと思っている。そういう子どもたちが上越にいるのだと思うと安心する。
- (五十嵐副委員長) : 前回指摘したことで、今回から入館者の区分をわけていただいた。目標の人数が一律5,000人になっているが、時季も展覧会の内容も違うと思う。この人数を設定した理由は何か。
- (笹川統括学芸員) : 前年の実績から算出している。すると大体一つの展覧会につき5,000人程度になる。

秋の展覧会については、前年の令和3年度「永青文庫展」が8,000人以上の来館があったが、今年度の「芸能科展」はそこまで見込めないだろうということで5,000人としている。

(五十嵐副委員長)：来館者は県外から呼ぶくらいの展覧会と、調査研究の成果を示すための展覧会とメリハリをつけてもいいのではないかと。来館者5,000人を設定することができるに限られてしまう時もあるので、人が入らなくても記録に残すような展覧会になってもいいと思う。開催中の「かわいい美術」は逆に2,000人としているが、2月11日のキャンドルナイトでは、たくさん人が入っているように感じたが、それでもまだ人数は達成できていないのか。

(笹川統括学芸員)：資料にはまだ2月11日の入館者数が反映されていない。最新では1,500人くらいの入館者数となる。

(五十嵐副委員長)：なぜこの展覧会だけ目標入館者数が2,000人なのか。

(笹川統括学芸員)：冬場については極端に入館者が少なくなる。雪が降り、天気が荒れてしまうと人は来ない。

(宮崎館長)：一人来てくれただけでもありがたい、という気持ちである。

(五十嵐副委員長)：冬は2,000人になって、春は他と同じで5,000人。観桜会もあるのだから、もう少し達成可能な数値で設定する方がいいのではないかと。

(笹川統括学芸員)：開館から3年経った。データを集めつつ、分析をしながら適切な目標設定ができるように努めたい。

(川崎委員)：SNSについて。Instagramを開設する予定はあるのか。

(笹川統括学芸員)：現在開設準備中である。

(川崎委員)：絶対にやった方がいい。画像を見せるSNSであるInstagramは美術館にあって、Facebookはどちらかというと利用者の年齢層が高い。Instagramは10代からの若い層にアプローチが可能で、影響力も高い。古径邸の写真などを発信すれば、それを見に来る人が必ずいると思う。

(伊藤学芸員)：Instagramは準備をしている。市のSNSアカウントの管理は広報対話課が行っているの、そこに開設したい旨を伝えてある。広報対話課からは「どのように運営していくのか、方針を決めたい」と言われている。

(川崎委員)：SNSはアクションが大事である。ハッシュタグを使いながら「#日本画」などでつながっていけるといい。運営は大変かもしれないが頑張ってもらいたい。

(高橋委員長)：美術館だけではなく、古径邸もある。美術鑑賞だけではなく楽しみ方ができることを特色として広報してみたらいい。本当は上越市全体で考えていったらいい。広報も、市民だけの広報以外のこともした方をやってもいいと思う。

## (2) 報告事項「令和5年度の事業内容について」(公開)

(笹川統括学芸員が資料にもとづき説明)

(高橋委員長)：メインになるのは生誕140年の小林古径展になると思う。全国から作品を借りて来る。そうすると、会期も長くできないということか。

(笹川統括学芸員)：会期中は無休としている。

(高橋委員長)：今作品を借用する期間はどのくらいなのか。

(笹川統括学芸員)：だいたい30日以内。短いところだと2週間。

(高橋委員長)：照明の明るさも制限されるのか。

(笹川統括学芸員)：100ルクス以下ということで指定される。

(高橋委員長)：美術館をつくる時にも議題になった古径の名品を借りて展示できる美術館にする、

というところで、美術専門運搬車の搬入口のことなど、基準をクリアしていないと借用できない。設計の時点から頭を悩ませた問題。そういった面では、このような大規模な展覧会は初めてとなるのでは。

(笹川統括学芸員)：新施設での大規模な古径展は初開催となる。

(宮崎館長)：140年だとほかの美術館ではあまりしないが、これが150年になると東京国立近代美術館などはまた展覧会をするだろう。そうなる貸し出しがより厳しくなる。今年は今も交渉が続いている。

(高橋委員長)：目標入館者は8,000人。

(宮崎館長)：コロナの状況も落ち着くだろうということでこの数字。

(笹川統括学芸員)：1日に200人来ないと達成できない。秋の展覧会に関しては新潟日報などメディアの力も加えながらやっていく。

(高橋委員長)：著名な作品が来るとわかれば全国から人は来る。

(笹川統括学芸員)：冬季の素描展は秋の企画展と連動している。二つ見ることで古径の作家としての全貌がわかる。二つ合わせて発信していきたい。

(高橋委員長)：柴田長俊展は来年3月から開催するというので、この表に入っているのか。

(宮崎館長)：準備を今年からやっていく。観桜会の開始に合わせて春の展覧会は開催している。近年は観桜会開始が早まり3月から開催しているため、春の展覧会は年度をまたぐ。

(笹川統括学芸員)：市内に柴田のステンドグラス作品があるので、写真展示などで紹介する。

(高橋委員長)：柴田長俊作品といえば、観光物産センターのステンドグラスはどうするのか。関係者にただの装飾品ではなく、美術作品であるから、同じように考えないようにはいつてある。

(宮崎館長)：現在検討中である。

(高橋委員長)：あれだけ大きな作品はなかなかないが、どこで管理するのが悩みである。

(宮崎館長)：新しく施設建設の時にに入れてもらうか、どうか。構造的には取り外し、再設置は可能であることを確認している。

(大塚委員)：柴田長俊は城北中学校出身。ステンドグラスが生徒玄関にある。長野県の工房に生徒と一緒に作らせてもらった。今柿崎中学校が53年目で上越最古の学校建築。数年後には学校建築ラッシュみたいな話になっていくのではないかな。そしたらそこで使えるかもしれない。

(笹川統括学芸員)：市内に残る作品も含めて柴田作品を紹介していきたい。

(高橋委員長)：美術館運営だけの話ではなく、幅広く考えた方がいい。すぐに結論が出る話ではないが、議論しておく必要があるだろう。

### (3) 今後の美術館運営に対する意見徴収（公開）

(高橋委員長)：どんな意見を求めているのか。

(笹川統括学芸員)：今後の美術館運営を見据えて、施設面の整備、展覧会の事業内容、教育活動のなど幅広くご意見を頂戴できればと考えている。

(川崎委員)：富岡惣一郎が上越出身なのに、どうしても南魚沼市にとられてしまった感じがする。富岡惣一郎の実家と協力して何かできないか。

(笹川統括学芸員)：今実家は富岡惣一郎の直系ではない人が管理している。富岡惣一郎のご子息も関係を知らないの、手を出しにくい。

(川崎委員)：今後のことで地元ゆかりの作品を考えてみた。自衛隊の防衛モニターをやっていて、資料館に初めて入った。そこに山下清の作品が飾ってあって驚いた。山下清が一日長

官というのをやったことがあるらしい。そういうところから借りてこられたらいい。なかなか入る機会もなく、地元にながら知らなかったのももったいないと感じた。

(宮崎館長) : あるところには作品はある。

(川崎委員) : 東北電力にも壁一面の大きな日本画がある。誰が描いたのかはわからない。

(高橋委員長) : 私も見たことがある。一度美術館で見に行かれたらどうか。東北電力の人も誰の作品かわかっていないと思う。

(笹川統括学芸員) : そういった企業の隠れたコレクションがある。

(大塚委員) : どこか情報提供できる窓口があればいいのでは。

(高橋委員長) : 難しいのは、見せてもらっても、全部は引き受けられないということ。大したものでもないコレクションもある。そういう作品を「寄贈したいから持っていってくれ」と言われても美術館側も困ってしまうだろう。収蔵庫も限界がある。

(笹川統括学芸員) : 収蔵庫の話だが、面積が限られている。将来計画としてどうするかは今後の課題である。

(大塚委員) : 収蔵庫とあわせて、展示室も少しずつ拡張していったらどうか。昨年の彫刻展の時はどうしても手狭に感じた。140周年記念小林古径展でも手狭さを感じるのではないか。希望は毎年声に出しておくことが大事かもしれない。うちの学校も毎年言い続けて、やっと「今年はトイレ改修の計画の年」と言われた。

(高橋委員長) : 美術館も苦勞して、美術館と博物館を分離した。当時は最初から展示スペースが小さいことはわかっていたが、とにかく美術館をつくることを優先した。関係者はみんな分かっているが、展示スペースは絶対にもっといる。足が疲れるくらいじゃないと。少なくとも倍は必要である。

(高橋委員長) : 美術館に「カフェが欲しい」という声を聴くが、それが目的で来る人もいる。カフェでお茶をして、「美術館に行ってきた」という。そこが大事。

(宮崎館長) : 今までみたいに市がすべて用意する必要はなくて、いくつかのやり方をやってみてもいいと思う。市が全部お金を出すのは難しいので、民間などでやりたい人がいればいい。

(大塚委員) : 駐車場の前の広い芝生のスペースは国のものなのか。

(笹川統括学芸員) : 市の土地である。

(大塚委員) : イベントをやるにはあの場所がいいと思う。展示室を広げるにしても道路側に広げていくような感じになるだろうか。

(笹川統括学芸員) : 検討が必要である。

(五十嵐副委員長) : そこに行かないとできない体験できないということが重要になってくると思う。大勢来ても受け入れられる余裕がある場所が必要。キャンドルナイトの日は、たくさん人が来たが居る場所がない。イベント計画を見ても、定員が5人や10人など、いい企画をしているのにもったいない。イベントスペースが欲しい。

(大塚委員) : 多目的なスペースということで、地元の美術をやっているグループなり、作家が発表の場として活用ができるような自由度が欲しい。小林古径の冠を背負った美術館だから難しいかもしれないが、地元で親しまれる美術館の使われ方をするともっと人が寄ってくるのではないか。すごい美術ではなくても、日用づかいの陶器、着物、切手、建築、など、一部の人の興味かもしれないけど、そういったもので使えるような貸しギャラリー的なちょっとしたスペースが欲しい。

(五十嵐副委員長) : いろんな企画をやっているが、どうしてもファインアートによっている。挑戦的な企画はどうか。「これがアートなの？」というものを仕掛けてみるのもいいのでは。古径の

作品と同じ施設にそういったものがあることに意味がある。

(大塚委員) : 別館的な感覚。今あるスペースの日本風な空気を感じるものとは違う異質な場所を併設する。

(高橋委員長) : それにしても展示スペースがやはり必要だ。今は展示室から二ノ丸ホールへ続くギャラリーまで展示が続いているが、当初は展示するスペースとして考えていなかっただろう。前の博物館の時のほうが広がった。

(宮崎館長) : 今後、歴史博物館の建物の更新時期が来る。次の博物館をどうするかと考えたときに、博物館と合わせて美術館、公園内の施設をどうするのかを考える時が来る。

(大塚委員) : 障がい者の方が来館されたことはあるか。どんな方で、どんな対応をされるのか。例えば目が見えない、作品をみることが出来ない。そういった人にはどのような対応をされるのか。齋藤三郎展の企画にはタッチ&トーク、春には野外彫刻清掃などあるが、触れてみる活動や目が見えない人への働きかけ、周知、配慮がもっとあってもいいのではないか。

(宮崎館長) : 昨年、目が見えない方、耳の聞こえない方を対象に古径邸画室を借りてお茶会をした。県立博物館の盲学校調査の事業に美術館が協力して、初めて開催したもので、それらをきっかけに今対応を考え始めている。案内の仕方なども考えないといけない。

(大塚委員) : 城北中学校の柴田長俊作品が設置されたときに、作品を見に来た郡司ななえさんをご案内した。作品を目の前にして、説明しながら鑑賞した。きれいだきれいだと喜んでいらっしやった。そのコミュニケーションを大事にできるかどうか。対応できるだけの余裕が必要であると感じた。

(宮崎館長) : 先ほどの茶会の時に初めて福祉協議会と連絡を取って、手話通訳や要約筆記をよんだ。手続きの流れを知ることが出来た。

(笹川統括学芸員) : 今年度も齋藤真一展の時に、関連イベントとして目が見えない方向けの鑑賞会を計画していた。県立歴史博物館と組んでやろうとしたが、文化庁の補助の決定が9月ごろまでずれ、間に合わなかった。警女の紹介にあわせて「目が見えない方に作品をどうやって伝えていくか」をテーマとして、凹凸のある絵画作品を触って感じてもらうという内容。国立民俗学博物館に全盲で学芸業務に携わっている広瀬さんという方がいる。その方から来てもらって色々教えてもらおうと計画はしていた。色々な方がアクセスできるような施設づくりが必要になってきていると感じる。

(高橋委員長) : 以上で議案についての審議を終了する。

(笹川統括学芸員) : 最後に宮崎館長が挨拶申し上げる。

(宮崎館長) : 最初お話ししたとおり、これから生活がコロナから正常化に向かっていくなか、先が明るくなるような温かいご意見をたくさんいただいた。ありがとうございました。

(終了)

## 9 問合せ先

小林古径記念美術館 TEL : 025-523-8680

E-mail : kokei@city.joetsu.lg.jp

## 10 その他

別添の会議資料もあわせてご覧ください。